

G. Berkeley の *Esse est percipi* と唯識説

海 野 孝 憲

G. Berkeley の Idealism と唯識説との類似性は彼の有名な「*Esse est percipi*」という命題の中に見い出すことができる。そこには音や色彩、形状等の存在はそれが聞えるということや、それらが視覚や触覚によつて知覚されることにその存在根拠が求められるのであつて、物質の存在は、言わば、それらの観念が知覚されることと同一視されている。しかし、この命題は M. R. Ayers が指摘しているように、所謂、事物の存在はそれが現に知覚されている場合にのみ認められるのであり「私が書きものをしている机は存在すると私は言う。私はその机を見らし、それに触れるのであり、」(PHK 3)「私が眼を閉じれば部屋の調度はすべて無に帰し、そして眼を開けただけでそれらは再び創造される」(PHK 45) というものに対し、これと相反する第二の面を有していることは注意すべきである。それは Berkeley が、PHK 3 の中で、「また書斎を出たとしたら、机は存在したと言うであろう。その意味はもし私が書斎にいたら机は知覚できたであろうという意味であり、また、ある他の精神が現実に机を知覚しているという意味である。」と述べている様に、現在、知覚していない机の存在が主張されていることである。この二つの面は前者が現在、知覚されている机の存在を主張しているのに対し、後者は現在、知覚されていない机の存在を主張している点で、相反する、矛盾的な関係にある。Berkeley は後者について、PHK 29 において、「真昼に眼を開ければ見るか見ないかの選択や視界に現われる特定対象の決定は、私の力能のうちにない。聴覚その他の感官についても同様で、これらの感官に印銘される観念は私の意志の創造物でない。それ故、そうした観念を産む或る他の意志ないし精神があるのである。」と述べ、観念を産み出すものとしての無限の精神を想定した上で、根源的には *percipi* を神による *percipi* と解釈している。

さて、上述の *Esse est percipi* と唯識説を対比することに先立つて、まず第一に、Berkeley の認識論における二つの主要な概念である精神と観念について、それのもつ意味を検討しよう。彼によれば、精神とは「心とか精神とか靈魂とか私自身」(PHK 3) とか呼ばれる「知覚をする能動的な存在者」(PHK 3, 27, 89) で

あり、「また観念とは無力で、はかない、依存的な存在物で、それだけで存立しなく、心すなわち精神的実体のうちに存在するのであり」(PHK 89), また「観念はすべて受動的で無力であり、従つて能動するものを心像ないし似寄りという仕方では心の中に表示することはできない」(PHK 27) ものであるとされているが、しかも「感官に印銘された観念は實在の（もしくは真実の）事物である。換言すれば、かような観念は實在する（もしくは真実に存在する。）」(PHK 90) と述べられ、観念の實在性が強く主張されている。

以下、対比の必要上、上述した Berkeley の精神と観念という二つの概念を整理しよう。

1. 精神とは知覚をする能動的存在者であり、観念のように、決して知覚される対象とはならないものである。(PHK 89, 142)
2. 精神は有限の精神と無限の精神すなわち神とに分けられ、後者は観念の創造者であり、原因である。(PHK 26, 29, 146)

1. 観念とは精神によつて知覚されることによつてのみ存在する無力性と受動性を本性とする依存的な存在物であり、何らの原因となる能力を有しない。(PHK 25, 89)

2. 観念は感官によつて現実知覚される場合には無限の精神の創造物である故に、實在の事物である。(PHK 29, 90)

さて、上述した精神と観念の定義を、唯識説における主客の能所関係を支える識と境という概念と対比することによつて両者の異質性をさぐることにしたい。

能所関係について、Berkeley と唯識説における根本的な相異点はすでに、A. K. Chatterjee が指摘しているように、Berkeley が精神と観念との関係を明確に主客に区別しているのに対し、唯識説は識と境の区別を識そのものの内部における見かけ上の区別としている点に存している。従つて、それを支える個々の概念においてそれに応じた相異が生ずることは避けることができない。唯識説では、上述の識そのものにおける能所関係について、中辺分別論(1-3)において、*vijñānapratibhāsa* という概念を用いて説明している。

「対境として、有情として、自我として、表象として顕現する識が生起する。しかし、その対象は實在するものではない。それが實在しないから、かれもまた存在しない。」(1-3)

ヴェスパン・ドゥの註釈によれば、対境（六境）と有情（五根）と自我（染汚意）

と表象 (六識) という所取, 能取として顕現する識が生起すると言われている。そこでは, 所取, 能取は広狭二義に用いられ, 対境と有情は所取であり, 自我と表象とは能取でありながら, アーラヤ識に対しては, 上述の所取, 能取はすべて所取として, 能取であるアーラヤ識の対象となつていることは注意すべきである。従つて, 識とは八識のことで, それは自己自身を対象化して境としているが, 所分別となつたアーラヤ識は, もはやアーラヤ識と言われないので, 境としては六境と五根と六識と染汚意のみを意味している。換言すれば, 唯識説における識とは常に能分別であるアーラヤ識の外に, 所分別の境として顕現する六識, 染汚意も含まれ, しかも, これら六識, 染汚意は更に能取として, それに対応する六境, 五根という所取の対象を有しており, Berkeley の精神のように, 観念に対する独立した能動的存在者としては説かれていない。更に, 境もまた, 究極的には, 識自身である故に, それの実在性が否定されるという点でも, Berkeley の観念とは根本的に相違している。この点は次に述べるように, 客観的な対象認識の問題に対する Berkeley と唯識説における根本的な立場の相違を示すことになる。

この問題について, Berkeley は「観念は知覚されることによつてのみ存在する無力で, はかない依存的な存在物ではあるが (PHK 89), 感官の観念は無限の精神の創造物である故に, 実在の事物である。(PHK 29, 90)」と述べ, 観念の実在性を無限の精神すなわち神による *percipi* によつて保証し, 解決しているのに対し, 唯識説は大乗莊嚴經論 (XI-21) において, 境の実在性について次のように, 勝義と世俗の二諦にわけて説明している。

「このように, (所取, 能取の) 二つの顕現はここに存在する。しかしその自体は存在しない。それ故に, 存在と非存在とが色等において説かれる。」

スティラマティの註釈によつて, 要約すれば, 幻術において, 石や木という素材の上に馬や象の姿が映し出されるように, 我々の日常経験する対境としての色等の事物も, 世俗としては識の上に顕わし出される。しかし幻術において馬や象として映し出されるものは, 実際は, 石や木であるように, 対境としての事物も勝義としては識であるので, 究極的には実在しないというものである。従つて, *Esse est percipi* を唯識説的に解釈すれば, 「感覺的事物の存在は知覚されていること, すなわち観念であることによつて, 究極的にはその実在性が否定される」ことになり, 上述した Berkeley の「感覺的事物の存在は知覚されていること, すなわち観念であることによつて, その実在性が保証される」(PHK 30, 33, 90) とは全く正反対の立場を示すことになる。従つて, 客観的な対象認識の問題

について、Berkeley が「私がどれほど自分自身の思惟について力能をもつているにせよ、私は見出すが、感官によつて知覚される観念は私の意志に同じように依存してはいない。」(PHK 29) と述べているように、究極的には絶対的な精神である神による観念の創造という事実によつて独在論 (solipsism) に落ちることなく、客観的な対象認識を可能にしているのに対し、認識主観の識自身が概念を形成する能力をもつという主観主義的な立場をとる唯識説としては、識と境のみによつては、この問題に十分な解答を与えることができず、ここに、*vāsanā* (余習) という概念の介在を必要としている。唯識説はこの問題について、「アーヤ識という潜在意識が無限の過去からの認識、経験の余習を蓄えており、その余習が未来における作用の潜在力として成熟し、時至つて、それが現勢化した時に認識が成立する。そして、ある対象、例えば、赤い花の経験的認識がすべての人に共通するのは、彼らが過去において同様の認識、経験の余習を蓄えているからである。」と説明している。

さて、以上において、G. Berkeley の *Esse est percipi* が唯識説と極めて類似した一面を有しているにもかかわらず、この命題を支える個々の概念が全く異質的なものであり、従つて、結果的には、その命題の意味するところは唯識説と正反対の立場を示すことが明らかとなつた。それは究極的には、経験的認識の普遍妥当性を根本的事実としてその認識の成立根拠を問うという西洋哲学の認識論の立場と、経験的認識の一切を「業」によつて把え、それを超える立場を追求することに焦点をおいた唯識説の立場の相違に基づくものであろう。

PHK=Principles of Human Knowledge. (Edited by Colin M. Turbayne)